

逆さ柱

福島第一原発の事故によって、今や、原子力技術に対する国民の信頼は地に落ちた感があります。

識者の中、取り分け引き続き原子力発電を推進しようとする立場の方からは、津波への対応が十分でなかったことは問題だが、原子力技術の安全性が低下したわけではないと主張しています。

しかし、国においては、これまで原子力施設は、重大な事故に対しても十分な安全余裕を持つよう設計されており、どんな時でも外部に放射性物質が漏れることはないと説明してきたのですから、原子力技術の安全性に疑問符がつくのは当然でしょう。

しばしば、想定外の地震や津波の規模であったということがいわれますが、それは所詮、人間の想像力が自然の力の前には無力だったということに過ぎません。

万が一、想定していたけれどコストなどの問題から対策を怠ってきたとすれば、危機管理の欠如そのものであり、安全神話をばらまいてきた関係者の責任は重大といわざるを得ません。

「人間の作るものに完全なものはない。仮に、非の打ち所のない完璧なものであっても、完成した瞬間からそれは崩壊が始まる。」

というのは、先人の深い洞察です。

日光東照宮の陽明門には模様が逆さになった柱が一つあります。これは、大工のミスではありません。あえて完成させなかったのだといわれています。

浄土宗総本山、京都知恩院は屋根の大屋根に瓦が2枚残されているというのも同じ考えによるもので、不完全であることに大きな意味があるということです。

福島第一原発は安全であるとしてスタートしたはずですが、今は崩壊した無

惨な姿を晒しています。

原子力発電を今後どうしていくかは、日本はもとより世界にとっても極めて大きな課題です。今後、中長期的な視点に立って冷静な議論をしていく必要がありますが、これまでのように、原子力は安全であるという前提に立った議論はできないでしょう。原子力の安全技術は、確かに高い技術の集積かもしれませんが、決して完全ではない、その意味からすれば、あの近代的な原子力発電所の中にも「逆さ柱」が必要なのではないのでしょうか。

不完全であると認識することは、引き続き完全なものになるよう努力することとあります。それが完成によって始まる崩壊を防ぐことになるという考えは、単なる縁起担ぎというより先人の知恵というべきであり、現代人の我々も、その知恵に学ぶべき時にいるのだと思っています。(塾頭 吉田 洋一)